

リスクベースで考える機械災害防止基礎講習受講報告

教育研究技術支援センター第1班 鈴木 徹

1. はじめに

職場で受講させてくれている労働安全衛生講習テーマにはいくつかの機械関連安全講習があり、その一つである標記講習を受講させていただいた。

2. 日 程

日 時：平成24年6月15日

会 場：山形ビッグウィング

3. カリキュラム抜粋

午前 講義3テーマ

午後 講義2テーマ、演習1テーマ

4. 概 要

平成22～23年度調査における国内の事業所における災害動向調査によれば、休業4日間以上の死傷労働災害において、機械災害は全体の25%を占めている。休業4日間というのは、例えば腕の骨折（重傷）の場合でも休業2～3日間程度であることからしても、相当の重傷事故である。機械災害の内、製造業で起きている事故が全体の40.3%を占め、なおかつ死亡事故がその内の半分を占めるほど機械関連の事故は多発化、重傷化傾向にある。こうした中で日本国内ではこれまで、“災害の主原因は人間にある”という立場に立ち、人の管理

体制と教育訓練に重きを置いた対策を講じてきたが、功を奏してこなかった。これに対し、欧州では災害防止は技術の問題と捉え、人への対策ではなく機械設備そのものに安全技術対策を施すと言う日本とは異なるアプローチで劇的に機械労働災害を減少することに成功している。この安全規格は国際安全規格（ISO/IEC）に盛り込まれ、JISはこれを追従している。「人は必ず間違いをするものである」と言う認識に立ち、危険を論理的に予測して事前に機械自体に保護方を施すという、『リスクベースドアプローチの安全化手法』について、講義を主体にグループ演習を交えた1日間の研修であった。

新しい手法による安全対策への取り組みは勉強になる面が多々あり、なおかつグループ演習も楽しみながらやれたが、その一方で、こうした安全対策は、製品生産のために機械が一日中稼働しているような職場では応用できる面が多々あり、効果が顕著で効能が実感できるだろうと思えた。学校のように機械そのものの稼働時間がきわめて短く限定されていて、機械の稼働目的が製品製造ではない職場では、なかなかアプローチ手法そのものの適用が難しく、効果も顕著に現れないだろうと思えた。